

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 住居属性分析からみた柄鏡形住居出現期の様相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 義一, Kawashima, Yoshikazu メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000424">https://doi.org/10.57529/0002000424</a>

## 住居属性分析からみた柄鏡形住居出現期の様相

川 島 義 一

### I はじめに

縄文時代中期末葉になると、関東・中部地方の拠点的な環状集落が終焉を迎える。これと時期を同じくするように、細長い張出部をもつ住居が出現し、短期間に周辺へと展開した。この住居は、形状が我が国で中世以降に用いられた「柄鏡」に類似することから「柄鏡形住居」とよばれている。

柄鏡形住居址は、一九二四年に東京都町田市の牢場遺跡において初めて発見されて以降（後藤一九三二a・b）、青森県から奈良県にかけて一〇〇ヶ所以上の遺跡で類例が報告されている（山本二〇一七）。柄鏡形住居址の研究史については、詳細な山本暉久の論攷（山本一九九九）を参照することとし、本稿では柄鏡形住居址研究の主要な課題である「張出部の起源」や「張出部の象徴的意味」について検討を行う。

柄鏡形住居の起源について山本暉久は、中部山地の「石柱・石壇」を起源とする敷石風習と、埋甕を埋設した小張出を起源とする張出部が融合したものと考えた（山本一九七六）。本橋恵美子も中部山地の屋内敷石を重要視し、これが隅円方形で小張出部に対してピットと埋甕を埋設した潮見台型住居（以下「潮見台型」<sup>1</sup>）と結びつくことにより、柄鏡形

敷石住居が成立したとしている（本橋一九八八）。張出部の用途については、狭い出入口により住居主体部を保温する寒冷化対策であるという考えも示されたが（後藤一九四〇）、近年は研究者の多くが、張出部は儀礼・祭祀・観念に関連するもので、住居の内外を区別するための特別な意味をもつものであると考えている（石井一九九四、佐々木二〇〇三、谷口二〇一〇）。柄鏡形住居址の名称について山本暉久は、柄鏡形住居址において敷石には重要な意味があるが、敷石をもたないものも多いことから、柄鏡形（敷石）住居を総称として用い、柄鏡形敷石住居址、柄鏡形住居址を必要に応じて使い分けることを提案している（山本一九八〇）。

牢場遺跡にて柄鏡形住居址が発見されてから一〇〇年近く、また前述の山本、本橋の論攷から三〇〇～四〇〇年が経過し、その間非常に多くの類例が報告されている。しかし、この類例には敷石、埋甕、対ピットをもたないものも多いことから、柄鏡形住居の起源と張出部の象徴的意味の再検討を行うこととした。

なお、本稿では張出部と敷石の関係を再検討することから名称として「柄鏡形住居址」を用い、各部は図1に示す呼称を用いることとした。

## Ⅱ 柄鏡形住居の出現時期と分布域

一般に、考古資料は伝播・拡散していく過程において、その考古資料の本来の特徴が変化し、失われていく場合が多い。柄鏡形住居も同様に、出現後に時間が経過し、空間的に拡散していく過程で、本来の特徴の一部が変化していた可能性が考えられる。そこで、本稿では分析対象を柄鏡形住居の出現期の住居址にしぼり、住居址がもつ住居属性（住居址に残る遺構属性）を定量的に分析することとした。

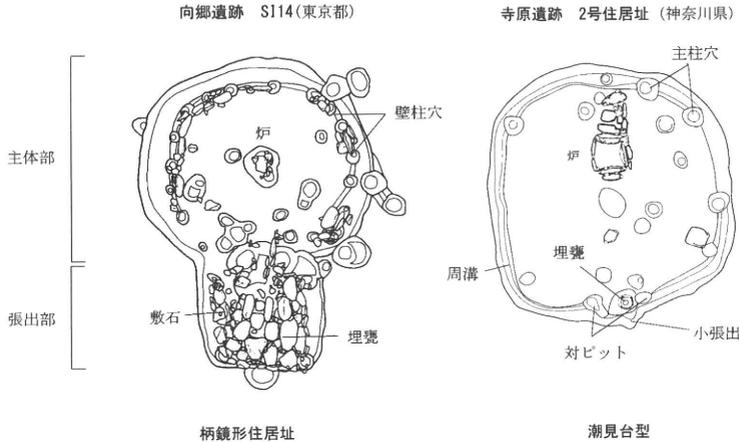
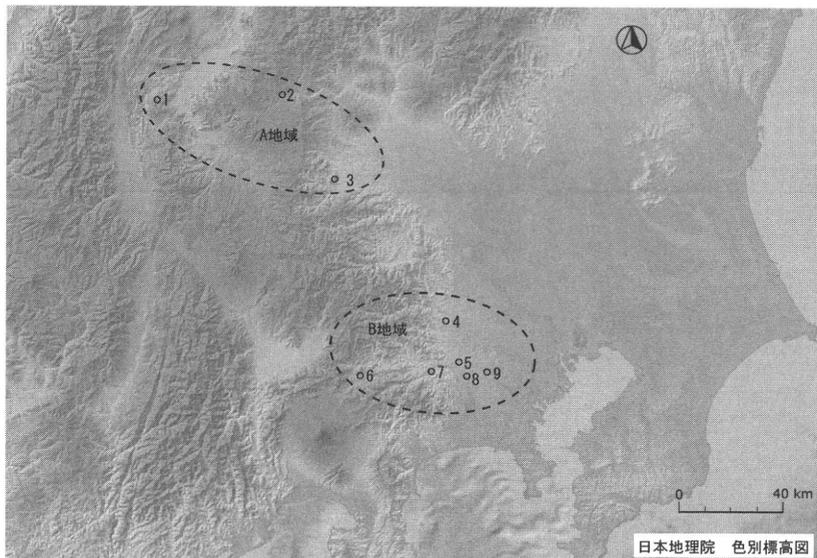


図1 住居址の各部呼称

まず分析対象とする住居址を集成するために、柄鏡形住居址が発見されている、関東・中部地方の加曾利E式期の遺跡の調査を行った。その結果、柄鏡形住居は、加曾利EⅢ(新)段階に長野県東信地域・群馬県西部地域(以下「A地域」と東京都・神奈川県地域(以下「B地域」)の距離的に離れた二つの地域に、明瞭な張出部をともなうて出現したことが判明した(図2)。両地域の加曾利EⅢ(新)式期の柄鏡形住居址の例を埋甕とともに示す(図3、図4)。その後、加曾利EⅣ式期になるとA・B地域ともに遺跡数や類例が急速に増加し、その分布域もA・B両地域を中心として周辺へと拡大している様子がうかがえる(図5・図6)。

次に、両地域で柄鏡形住居址が多く検出されている遺跡を選び、時間とともに、遺跡内で柄鏡形住居址数などの様に変化するのかをみてみた(表1)。この表から、遺跡により柄鏡形住居が出現する時期は前後するが、各遺跡ともに遺跡内に柄鏡形住居が出現したのちは、短期間に柄鏡形住居の比率が高まっている様子がうかがえる。

さらに、加曾利EⅠ式期から加曾利EⅣ式期の潮見台型の集成を行った(図7)。その分布域は、柄鏡形住居址分布域のB地域と長野県八ヶ岳西南山麓・諏訪湖周辺地域の二地域に分かれた。しかし、



〔長野県〕 1. 屋代 〔群馬県〕 2. 横壁中村 3. 田篠中原 〔東京都〕 4. TNT.No. 72 5. 木曾森野  
〔山梨県〕 6. 中谷 〔神奈川県〕 7. 上中丸 8. 新戸 9. 二ノ丸

図2 加曾利EⅢ(新)式期の柄鏡形住居址分布図

柄鏡形住居址の分布域の一つであるA地域には遺跡数が少なく、その類例もわずかであった。また、図5・図6で明らかのように八ヶ岳西南山麓・諏訪湖周辺地域には加曾利EⅢ(新)式期の柄鏡形住居址はみられない。このような分布の状況からは、柄鏡形住居の起源を潮見台型に求めることは難しいと考える。

### Ⅲ 住居属性からみた出現期の柄鏡形住居

#### (一) 住居属性の分類

住居属性の組み合わせが、時間とともにどの様に変化しているかをみるために、出現期である加曾利EⅢ式期・EⅣ式期に柄鏡形住居址が検出された遺跡を抽出し、当該期の住居址の住居属性を調査した。調査した住居属性は、主体部形状、主体部規模、張出部、柱穴型式、炉型式や対ピット、敷石、埋甕、周溝の有無である。しかし、これらの住居属性のな

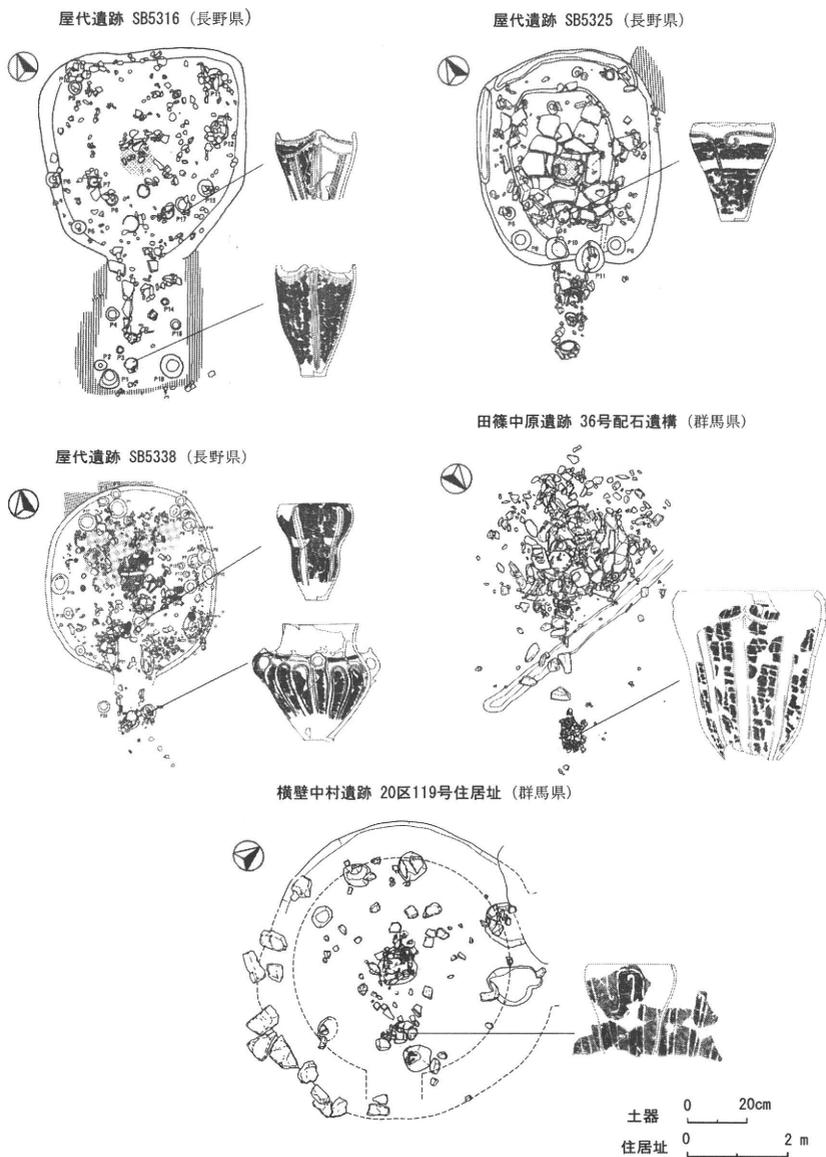
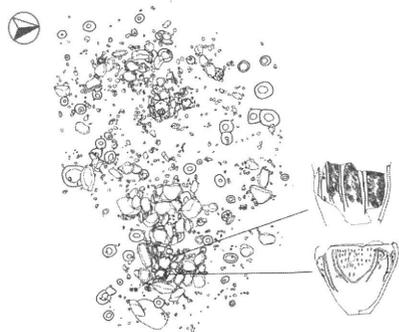
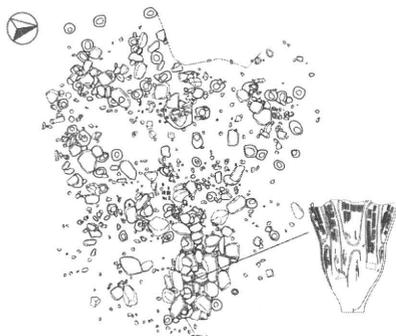


図3 加曾利EⅢ(新)式期の柄鏡形住居址(A地域)

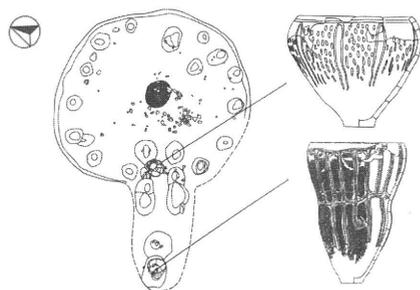
新戸遺跡 J3号敷石住居址 (神奈川県)



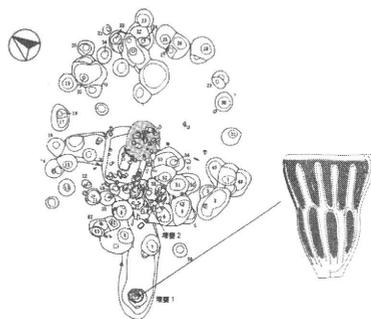
新戸遺跡 J9号敷石住居址 (神奈川県)



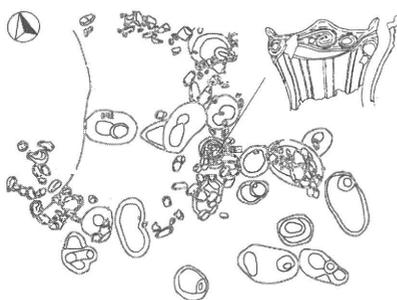
木曾森野遺跡 J6号敷石住居址 (東京都)



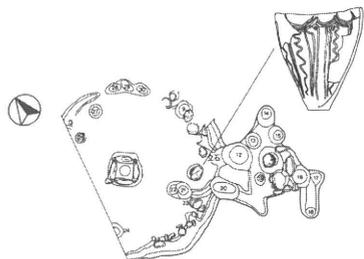
二ノ丸遺跡 J26号住居址 (神奈川県)



上中丸遺跡 121号住居址 (神奈川県)

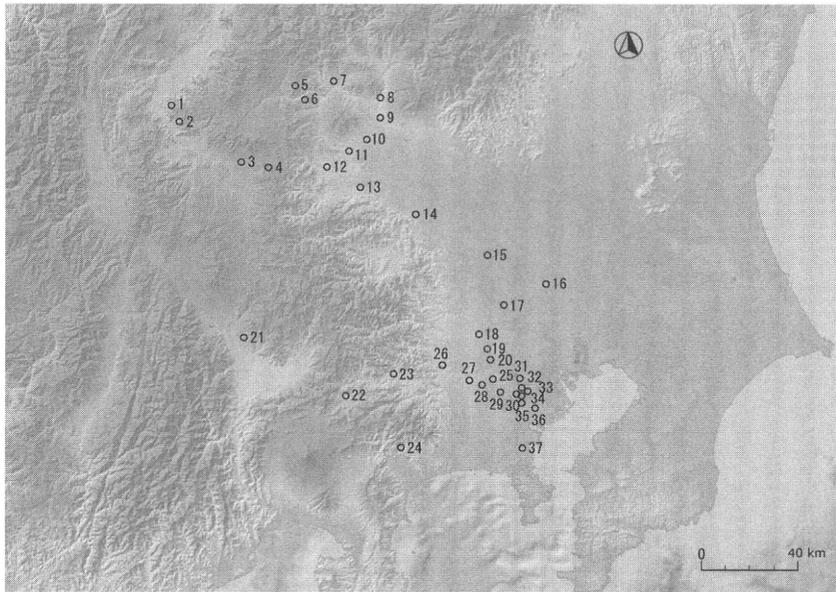


上中丸遺跡 95号住居址 (神奈川県)



土器 0 20cm  
住居址 0 2 m

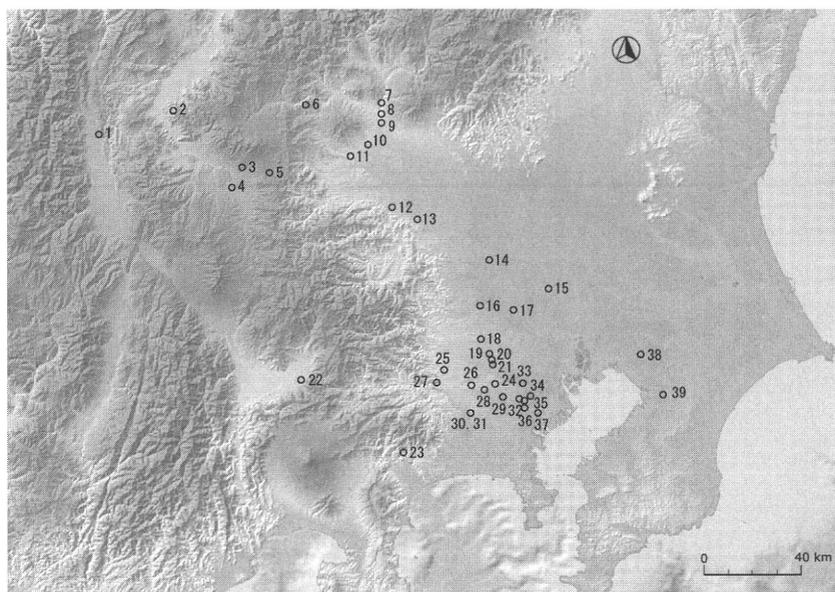
図4 加曾利EⅢ(新)式期の柄鏡形住居址 (B地域)



【長野県】 1. 屋代 2. 円光房 3. 郷土 4. 吹付 【群馬県】 5. 長野原一本松 6. 横壁中村 7. 久森 8. 三原田  
 9. 白川森松 10. ミツ子沢中 11. 野村 12. 行田梅木平 13. 田篠中原 【埼玉県】 14. 出口 15. 上手 16. 摺谷  
 【東京都】 17. 新山 18. TNT. No. 72 19. 向郷 20. 南養寺 【山梨県】 21. 屋敷添 22. 大月 23. 大倉  
 【神奈川県】 24. 尾崎 25. 岡上丸山 26. 川尻中村 27. 寺原 28. 当麻第3地点 29. 新戸 30. 稲ヶ原A  
 31. 高山 32. 二ノ丸 33. 大熊仲町 34. 月出松 35. 加賀原 36. 羽沢大道 37. 洋光台銀田

図5 加曾利EⅣ(古)式期の柄鏡形住居址分布

かで主体部形状と主体部規模は、「不明」が非常に多かった。これは、加曾利EⅢ式期になると竪穴住居の掘り込みが浅くなり、土地削平などの影響を受けやすくなるためである。分析にこれらの住居属性を含めると、分析対象とする住居址サンプル数が大幅に減少するため、今回分析する住居属性からはこれらを除外した。さらに、住居属性の一部が不明な住居址を除いた結果、A地域では一〇遺跡の一六〇例の住居址、B地域では三〇遺跡の二二七例の住居址を分析対象とすることができた。これらの住居址がもつ住居属性を整理し、張出部を3カテゴリ（張出部あり、小張出、張出部なし）、柱穴型式6カテゴリ（主柱穴4本、主柱穴5本、主柱穴6、主柱穴多数<sup>(3)</sup>、壁柱穴、柱穴なし、その他）、対ピットを有無の1カテゴリ、炉型式を7カテゴリ（地



[長野県] 1.北村 2.屋敷 3.郷土 4.平石 5.吹付 [群馬県] 6.横壁中村 7.三原田 8.白川傘松 9.三ツ子沢中  
 10.野村 11.空沢 [埼玉県] 12.古井戸 13.出口 14.上手 15.桐谷 16.坂東山 [東京都] 17.新山  
 18.TNT.No.72・796 19.南養寺 20.野津田上の原 21.木曾森野 [山梨県] 22.三口神平 [神奈川県] 23.尾崎  
 24.岡上丸山 25.川尻中村 26.寺原 27.大地開戸 28.当麻第3地点 29.新戸 30.座間キャンプ 31.平和坂  
 32.稲ヶ原A 33.高山 34.二ノ丸 35.月出松 36.加賀原 37.羽沢大道 [千葉県] 38.内野第1 39.大膳野南

図6 加曾利EⅣ(新)式期の柄鏡形住居址分布

床炉、石囲炉、埋甕炉、石囲埋甕炉、石囲土器片炉、土器片囲炉、炉なし)、敷石、埋甕、周溝を有無のそれぞれ1カテゴリーに分類した。

なお、これらの住居址は、次の遺跡より抽出した。

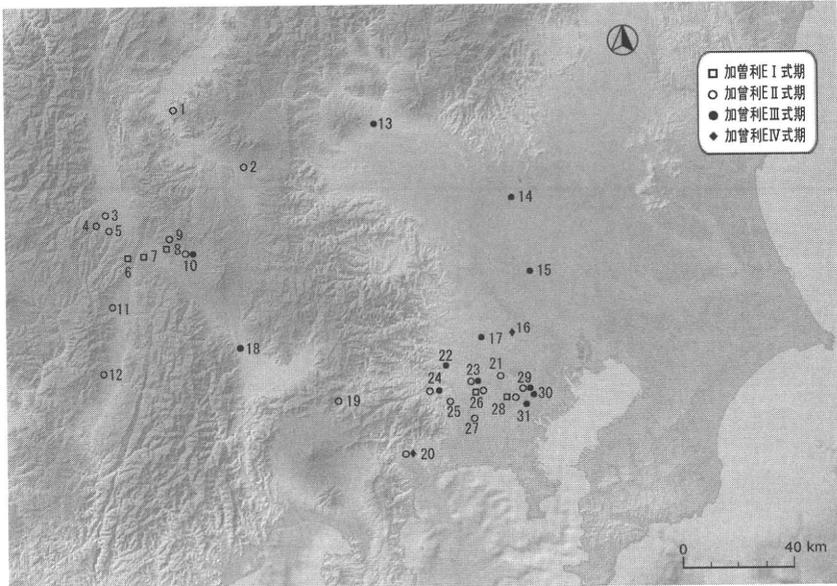
**A地域** 「長野県」屋代遺跡、郷土遺跡、「群馬県」横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、三原田遺跡、白川傘松遺跡、三ツ子沢中遺跡、野村遺跡、行田梅木平遺跡、田篠中原遺跡

**B地域** 「東京都」新山遺跡、多摩ニュータウン(TNT) No.72遺跡、南養寺遺跡、野津田上の原遺跡、木曾森野遺跡、「神奈川県」尾崎遺跡、岡上丸山遺跡、北原遺跡、川尻中村遺跡、寺原遺跡、大地開戸遺跡、当麻遺跡第3地点、上中丸遺跡、座間キャンプ遺跡、平和坂遺跡、蟹ヶ沢遺跡、新戸

表1 遺跡内の柄鏡形住居址数の推移

遺跡名 (所在地)	張出部	時期				文献
		加曾利 EⅢ(古)式期	加曾利 EⅢ(新)式期	加曾利 EⅣ(古)式期	加曾利 EⅣ(新)式期	
屋代遺跡 (千曲市)	あり		8	2	1	長野県文化振興事業団編 2000
	なし	10	5	1	1	
郷土遺跡 (小諸市)	あり		1		4	長野県埋蔵文化財センター編 2000
	なし	10				
横壁中村遺跡 (群馬県長野原町)	あり		4	5	2	群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005
	なし	14	12	1		
三原田遺跡 (渋川市)	あり			2	4	群馬県企業局開発課編 1980
	なし	31	1			
野村遺跡 (安中市)	あり		3	2	2	安中市教育委員会編 2003
	なし				1	
行田梅木平遺跡 (安中市)	あり		1	2		山武考古学研究所編 1997
	なし		2			
白川傘松遺跡 (高崎市)	あり		2	1	2	群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1996
	なし	5		1		
田篠中原遺跡 (富岡市)	あり		2			群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1990
	なし	7	2			
新山遺跡 (東久留米市)	あり			1	3	新山第1遺跡調査団編 1977
	なし		6	7	5	
TNT No. 72遺跡 (八王子市)	あり		2	9	6	東京都生涯学習財団編 2004
	なし	19	8	1	1	
木曾森野遺跡 (町田市)	あり		1	2	4	木曾森野地区遺跡調査団編 1989
	なし		6			
当麻遺跡第3地点 (相模原市)	あり			2	3	神奈川県教育庁社会教育部 文化財保護課編 1977 b
	なし	11	5		3	
新戸遺跡 (相模原市)	あり		2	5	1	神奈川県立埋蔵文化財センター編 1988
	なし					
二ノ丸遺跡 (横浜市)	あり		2	2	1	横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2003
	なし	17	10	2	1	
月出松遺跡 (横浜市)	あり			2	3	横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2005
	なし	21	4			
大熊仲町遺跡 (横浜市)	あり			4		横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 2000
	なし	4	2	3		
稲ヶ原A遺跡 (横浜市)	あり			2	2	横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 1992
	なし	1				
尾崎遺跡 (神奈川県山北町)	あり			2	1	神奈川県教育庁社会教育部 文化財保護課編 1977 a
	なし	4	5	2		

住居属性不明および時期不明は除く。



〔長野県〕 1. 屋代 2. 郷土 3. 淀の内西 4. 洞 5. 殿村 6. 長塚 7. 花上寺 8. 上の平 9. よせの台 10. 棚畑  
 11. 月見松 12. 増野新切 〔群馬県〕 13. 空沢 〔埼玉県〕 14. 修理山 15. 中川稲荷山 〔東京都〕 16. 扇山  
 17. TNT No. 72 〔山梨県〕 18. 石之坪 19. 中谷 〔神奈川県〕 20. 尾崎 21. 潮見台 22. 川尻中村 23. 寺原  
 24. 大地間土 25. 荻野上ノ原第2 26. 当麻第3地点 27. 蟹ヶ沢 28. 稲ヶ原A 29. 二ノ丸 30. 大熊仲町 31. 月出松

図7 潮見台型の分布図

遺跡、赤田地区遺跡No.1、赤田地区遺跡No.15、華藏台南遺跡、稲ヶ原A遺跡、高山遺跡、小丸遺跡、二ノ丸遺跡、大熊仲町遺跡、月出松遺跡、加賀原遺跡、桜並遺跡、羽沢大道遺跡、洋光台猿田遺跡

## (二) 住居属性の地域差と時間的変遷

住居属性の地域別、時期別傾向をみてみる。

**A地域** (表2) 「a1張出部あり」の柄鏡形住居が加曾利EⅢ(新)式期に出現する。この時期には、「a3張出部なし」の住居址二七軒に対し、「a1張出部あり」が一七軒とその比率は四〇パーセント程度であるが、時間とともにその比率は増加し、加曾利EⅣ(新)式期には八〇パーセントとなる。「a2小張出」は加曾利EⅢ(古)式期の一例のみである。柱穴型式は、加曾利EⅢ(古)式期には「b1主柱穴4

本」、「b4 支柱穴多数」が比較的多いが、「b2 支柱穴5本」、「b3 支柱穴6本」、「b5 壁柱穴」や「b6 柱穴なし」もあり多様な様子を示している。その後加曾利EⅢ(新)式期になると、「a3 張出部なし」は同様に多様であるが、「a1 張出部あり」では「b5 壁柱穴」と「b6 柱穴なし」が高い比率を示している。加曾利EⅣ(新)式期になると「b6 柱穴なし」も減少し、ほとんどが「b5 壁柱穴」となる。対ピットは、張出部が出現する前の加曾利EⅢ(古)式期にはまったくみられないが、加曾利EⅢ(新)式期や加曾利EⅣ(古)式期には二五パーセント程度、加曾利EⅣ(新)式期には半数が「c1 対ピットあり」となる。しかしこれは、この時期になっても、「a1 張出部あり」の半数は「b2 対ピットなし」であるという見方もできる。炉型式は、加曾利EⅢ(古)式期には「d2 石囲炉」と「d4 石囲埋甕炉」が高い比率を示すが、その後「d4 石囲埋甕炉」は減少し、ほとんどが「d2 石囲炉」となる。敷石は、加曾利EⅢ(古)式期にはわずかであるが、加曾利EⅢ(新)式期には張出部の有無にかかわらず増加し、「a3 張出部なし」の住居址の半数、「a1 張出部あり」の住居址のほとんどが「e1 敷石あり」となる。埋甕は加曾利EⅢ(古)式期には三〇パーセント程度が埋設しており、その後その比率が張出部の有無にかかわらず増加し、加曾利EⅣ(新)式期には、半数が「f1 埋甕あり」となる。周溝は加曾利EⅢ(古)式期には、半数の住居址がもっていたが、次第にその比率が減少している。

**B 地域** (表3) 本地域でも、「a1 張出部あり」の柄鏡形住居が加曾利EⅢ(新)式期に出現する。その比率はA地域より少なく一五パーセント程度であるが、その後急速に高まり、加曾利EⅣ(新)式期には九〇パーセントにまで増加する。「a2 小張出」は、加曾利EⅢ(古)式期には二〇パーセント程度であるが、加曾利EⅢ(新)式期になると減少し、加曾利EⅣ(新)式期にはまったくみられなくなる。柱穴型式は、加曾利EⅢ(古)式期には「b1 支柱穴4本」が四〇パーセント、「b2 支柱穴5本」および「b3 支柱穴6本」が二〇パーセントと支柱穴タイプがほとんどであるが、「b5 壁柱穴」や「b6 柱穴なし」もわずかにみられる。その後、「a1 張出部なし」では支柱穴タイプが多く、「a1 張出部あり」で

は「b5壁柱穴」が中心となるが、主柱穴タイプや「b6柱穴なし」もみられる。対ピットは、加曾利EⅢ(古)式期に「a3張出部なし」で二五パーセント、「a2小張出」では七〇パーセント以上と高い比率を示す。その後「a3張出部なし」では比率が下がるが、「a1張出部あり」では七〇パーセント以上である。炉型式は、加曾利EⅢ(古)式期には「d2石囲炉」が中心であり、次いで「d1地床炉」が高い比率を示す。加曾利EⅢ(新)式期になると、張出部の有無にかかわらずに「d1地床炉」の比率が高まり、加曾利EⅣ(新)式期には「d2石囲炉」と「d1地床炉」は同程度の比率となる。「e1敷石あり」の住居址は、加曾利EⅢ(古)式期にはわずかであった。加曾利EⅢ(新)式期には「a1張出部あり」の住居址のほとんどが「e1敷石あり」となるが、「a3張出部なし」や「a2小張出」はすべて「b1敷石なし」である。「a3張出部なし」に「b1敷石なし」が多い傾向は、加曾利EⅣ式期にも継続するが、「a1張出部あり」で「b1敷石なし」の住居址も二五パーセント程度に増加する。「f1埋甕あり」は加曾利EⅢ(古)式期の住居址の六五パーセント程度と高く、特に「a2小張出」はほとんどが「f1埋甕あり」である。加曾利EⅢ(新)式期になっても、「a2小張出」や「a1張出部あり」で高い比率を示す。加曾利EⅣ(新)式期には「a1張出部あり」で七〇パーセントとなるが、敷石と同様に三〇パーセントは「f2埋甕なし」である。周溝はA地域と同様に、加曾利EⅢ(古)式期には半数の住居址がもっていたが、次第にその比率が減少している。

以上の結果を、住居属性ごとに両地域を対比させて整理する。

**張出部** 両地域ともに加曾利EⅢ(新)式期に出現し、その後、比率は異なるが急増している。「a2小張出」は地域差が大きく、A地域ではわずかしか検出されず、B地域でも加曾利EⅢ(新)式期以降は減少している。

**柱穴型式** 「a3張出部なし」と「a2小張出」は主柱穴タイプが中心であり、「a1張出部あり」は「b5壁柱穴」が多い。

「b5壁柱穴」は、加曾利EⅢ(古)式期にすでに採用されている。

表2 A地域の住居属性の分析(168例)

住居属性		時期											
		加曾利EⅢ(古)式期			加曾利EⅢ(新)式期			加曾利EⅣ(古)式期			加曾利EⅣ(新)式期		
a 張出部	a1 あり						17			17			16
	a2 小張出		1										
	a3 なし	72			27			6			4		
b 柱 穴	b1 主柱穴4本	18	1		8			1					
	b2 主柱穴5本	8			4		2			1	1		1
	b3 主柱穴6本	12			4					1	1		
	b4 主柱穴多数	19			1		1	1					
	b5 壁柱穴	11			4		7	3		5	2		14
	b6 なし	4			6		7	1		10			1
	b7 その他												
c 対ビット	c1 あり				1		4			5			8
	c2 なし	72	1		26		13	6		12	4		8
d 炉	d1 地床炉	1			4		2			1	1		1
	d2 石囲炉	39	1		16		11	3		6	2		13
	d3 埋壘炉	1			1					2			
	d4 石囲埋壘炉	30			5		3	2		6	1		2
	d5 石囲土器片炉												
	d6 土器片囲炉												
	d7 なし	1			1		1	1		2			
e 数 石	e1 あり	2			9		15	5		17	2		15
	e2 なし	70	1		18		2	1			2		1
f 埋 壘	f1 あり	24	1		13		12	3		13	3		9
	f2 なし	48			14		5	3		4	1		7
g 周 溝	g1 あり	34			4		1	1					3
	g2 なし	38	1		23		16	5		17	4		13

表3 B地域の住居属性の分析 (227例)

住居属性		時 期														
		加曾利EⅢ(古)式期			加曾利EⅢ(新)式期			加曾利EⅣ(古)式期			加曾利EⅣ(新)式期					
a 張出部	a1 あり						9					52				41
	a2 小張出		14			9				1						
	a3 なし	52				41				19				5		
b 柱 穴	b1 主柱穴4本	23	3			14	5			3			2	5		2
	b2 主柱穴5本	10	5			14	3	1		10			6			5
	b3 主柱穴6本	10	4			4				1			1			
	b4 主柱穴多数															
	b5 壁柱穴	6	1			6	1	7		3			37			29
	b6 なし							1		1	1		5			4
	b7 その他	3	1			3				1			1			
c 対ピット	c1 あり	14	10			3	6	7		3			39			30
	c2 なし	37	4			38	3	2		16	1		13	5		11
d 炉	d1 地床炉	13	3			15	1	4		12			21	5		16
	d2 石囲炉	32	10			20	8	3		5	1		19			19
	d3 埋壘炉	6	1			1				1			4			1
	d4 石囲埋壘炉					1										1
	d5 石囲土器片炉					1		1					8			2
	d6 土器片囲炉					3				1						1
	d7 なし	1						1								1
e 敷 石	e1 あり	1	4					8		1	1		36			31
	e2 なし	51	10			41	9	1		18			16	5		10
f 埋 壘	f1 あり	31	13			9	8	8		9	1		37			30
	f2 なし	21	1			32	1	1		10			15	5		11
g 周 溝	g1 あり	31	12			15	9	1		2			9	5		6
	g2 なし	21	2			26		8		17	1		43			35

対ピット 加曾利EⅢ(古)式期には地域差があり、B地域では多く、特に「a2小張出」では高率である。加曾利EⅣ(新)式期には、「a1張出部あり」で増加するが、二〇〇～三〇〇パーセントは「b2対ピットなし」である。

炉型式 両地域ともに「d2石囲炉」が中心であるが、B地域では「d1地床炉」が次第に増加している。

敷石 両地域ともに加曾利EⅢ(古)にはわずかであるが、加曾利EⅢ(新)式期に増加する。「a1張出部あり」では、加曾利EⅣ(新)式期に高率を示すが、B地域の「a1張出部あり」では、「b1敷石なし」が二〇〇～三〇〇パーセントを示す。

埋甕 両地域とも加曾利EⅢ(古)式期には約半数が埋設しており、以降その比率が「a1張出部あり」ではさらに高まる。しかし、「a1張出部あり」でも、二〇〇～三〇〇パーセントは埋設していない。

周溝 両地域とも同様の傾向を示し、加曾利EⅢ(古)式期には半数の住居址がもつが、次第に減少している。

このように、柄鏡形住居は、加曾利EⅢ(新)式期にA地域・B地域の両地域に出現するが、柄鏡形住居の特徴とされる壁柱穴、対ピット、敷石、埋甕は、出現前の加曾利EⅢ(古)式期にも存在することや、EⅣ(新)式期になっても、これらをもたない柄鏡形住居が多いことなど、柄鏡形住居がもつ住居属性の組み合わせは多様であることが明らかになった。

#### IV 住居属性間の相関関係からみた張出部の起源

##### (一) 住居属性を用いた分析

以上の両地域の検討結果からも、住居属性の組み合わせは非常に多様であることがわかる。このように多様な住居

属性の組み合わせをもつ住居址を分類し、その類似度や変遷を論じる際には、研究者の恣意性を如何に排除するか一つの課題である。研究者の主観にもとづいた分類や分析では、その結論や解釈に十分な納得性を与えることはできない。多様な属性の組み合わせから、客観的で納得性のある住居属性間の関連性を導く分析方法として多変量解析がある。多変量解析には様々な解析方法がある。本稿の目的は、住居属性間の相関関係を分析し、張出部と強い相関関係を示す住居属性を明らかにすることにより、張出部の起源を検討することである。また、集成した住居属性は張出部の有無や炬型式という質的データである。このように、数値としてあらわすことができない質的データ間の相関関係を数値で、視覚的に把握する方法としては、多変量解析の分析法の一つである対応分析（コレスポンデンス・アナリシス）が有効である。

## （二）対応分析の方法<sup>4</sup>

対応分析では、クロス集計表とよばれるサンプルごとにカテゴリーの有無を1・0であらわした表を作成することから始める。簡単なクロス集計表の例を用いて対応分析の方法を説明する（図8）。この表ではサンプルを行項目に、分類したカテゴリーを列項目としている。対応分析では、この表を行列とみなして、行項目と列項目の相関が最大になるように、つまり、表の左上から右下へ向かう対角線上に、1のセルがなるべく並ぶように、行と列の双方の並び替えを行う。しかし、この並び替えを行ったとしても実際には対角線上に1のセルが直線的に並ぶことはなく、ある幅をもって並ぶのが普通である。このとき対角線に対して、1のセルが位置する幅が狭いほど相関関係が強く、広いほど相関関係が弱いことになる。この行と列の並び替えは、列項目数・行項目数の少ない方の数から1を引いた回数行われ（この表の場合は列のカテゴリー数が少なく七回となる）、もつとも相関関係が強いものから順次、DIM1・

DIM2……DIM7とされる。さらに、その並び替えの都度、それぞれのDIMを表す関係式が、住居属性ごとのカテゴリ・スコアとよばれる係数を用いて計算される。この係数は絶対的な係数ではなく、それぞれのDIMにおいて住居属性間の相対的な関係を表すものである。このカテゴリ・スコアの値が近い住居属性間は相関関係が強いことを表している。この計算結果から、もつとも相関関係が強いDIM1をX軸に、次に相関関係が強いDIM2をY軸に、カテゴリ・スコアの値を座標の数値として配置したCS Factor Mapとよばれる散布図が作成される。この散布図においても、近い位置に配置されている住居属性間ほど相関関係が強いということが出来る。なお、この散布図のX軸・Y軸のDIMに付記されている数値(パーセント)は寄与率とよばれ、七回の並び替えが、どの程度相関関係を表しているかを示すもので、DIM1がもつとも大きく、DIM7までの合計が100パーセントとなる。一般に、DIM1とDIM2の寄与率の合計値が60パーセント以上であれば相関関係が強いと判断できる。

以上のような複雑な計算にはコンピュータが不可欠である。今回の対応分析には、パソコン上で動作する「R (version 3.3.2)」を用いた。Rは、フリーの統計解析ソフトウェアで、そのソースが公開されていることから、世界中の研究者により改良がくわえられている。簡単なコマンド入力力で各種の統計計算が行え、その結果をグラフィックス出力ができる非常に便利な統合ソフトウェアである。Rには、様々な統計分析を行うための、パッケージが多く用意されている。本稿の対応分析では、「FactoMineR」パッケージを用いた(金二〇〇九)。

### (三) 対応分析からみた住居属性の相関関係

今回の分析では、A・B両地域の差異や時期的な変遷をみるために、住居址を地域別に分け、さらに加曾利EⅢ(古)式期からEⅣ(新)式期の4時期に分けた。そして、住居属性のカテゴリを列項目に、住居址を行項目に配置したク

ロス集計表を作成し、分析を行った。

対応分析の結果として出力された散布図 (Cs Factor Map) をみてる (図9～図12)。

#### A 地域

**加曾利EⅢ(古)式期** 寄与率の合計値は三〇パーセントと小さく、住居属性間の相関関係は弱い。特に「b6柱穴なし」、「d3埋甕炉」、「a2小張出」は他の住居属性からは離れている。

**加曾利EⅢ(新)式期** 寄与率の合計値はここでも約三〇パーセント以下で、住居属性間に強い相関関係はみられない。その中で、「f1埋甕」と「e1敷石」は「a1張出部あり」に比較的近く、「b1支柱穴4本」と「d7炉なし」は他の住居属性、特に「a1張出部あり」からは離れている。

**加曾利EⅣ(古)式期** 寄与率の合計値は約三六パーセントとわずかに増加する。ここでも「f1埋甕」と「e1敷石」は「a1張出部あり」に近い。「b4支柱穴多数」と「g1周溝」は他の住居属性からは離れている。

**加曾利EⅣ(新)式期** 寄与率の合計値は約四三パーセントとさらに増加する。その中で「f1埋甕」、「e1敷石」、「c1対ピット」、「b5壁柱穴」、「d2石囲炉」が「a1張出部あり」に近い。

#### B 地域

**加曾利EⅢ(古)式期** 寄与率の合計値は約三八パーセントと低く、住居属性間の相関関係は弱い。とくに、「e1敷石」、「b5壁柱穴」、「d3埋甕炉」は他の住居属性から離れている。

**加曾利EⅢ(新)式期** 寄与率の合計値は約四四パーセントと少し増加する。ここでは、「a2小張出」の近辺には他の住居属性がない。「e1敷石」は「a1張出部あり」に近いが、「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「f1埋甕」は、少し離れている。

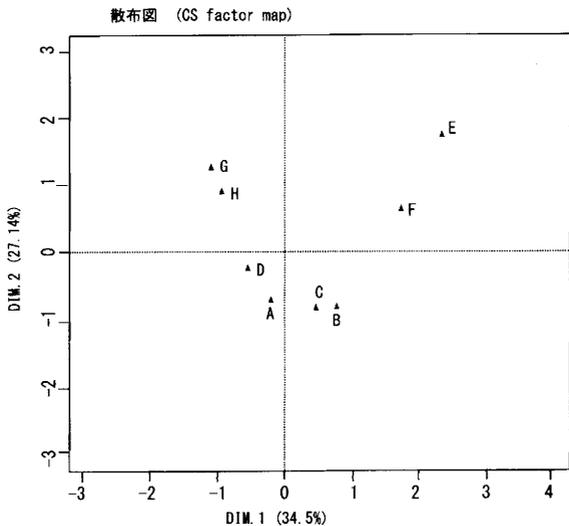
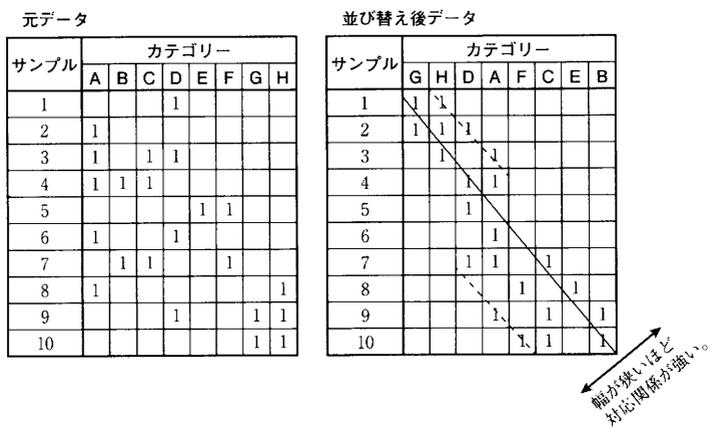


図8 対応分析の方法

加曾利EⅣ(古)式期 寄与率の合計値は約四二パーセントと変化していない。ここでも「a2小張出」と「b6柱穴なし」は他の住居属性から大きく離れている。「e1敷石」、「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「f1埋甕」は「a1張出部あり」に近い。

加曾利EⅣ(新)式期 寄与率の合計値は約四九パーセントと増加する。住居属性間の相関関係が少し強まったことが分かる。ここでは、「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「e1敷石」、「f1埋甕」が「a1張出部あり」に近く、「b1支柱穴4本」と「a3張出部なし」はこれらの住居属性から大きく離れている。

#### (四) 対応分析の結果

以上の対応分析の結果から、柄鏡形住居址の特徴とされる「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「e1敷石」、「f1埋甕」と「a2小張出」、「a1張出部あり」の相関関係をみてみる。A・B両地域ともに張出部出現以前の加曾利EⅢ(古)式期には「a2小張出」と「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「e1敷石」、「f1埋甕」の相関関係は弱い。加曾利EⅢ(新)式期になると「a1張出部あり」と「e1敷石」の相関関係のみがみられ、「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「f1埋甕」は、他の住居属性より少し強い程度である。加曾利EⅣ(古)式期になると次第に、これらとも相関関係が強まり、EⅣ(新)式期になり柄鏡形住居は、「b5壁柱穴」、「c1対ピット」、「e1敷石」、「f1埋甕」をもつという齊一的傾向が出てくる。しかし、「a2小張出」とこれらの住居属性とは、まったく相関関係がみられない。ここでも潮見台型が、柄鏡形住居の起源でないことが明らかになった。

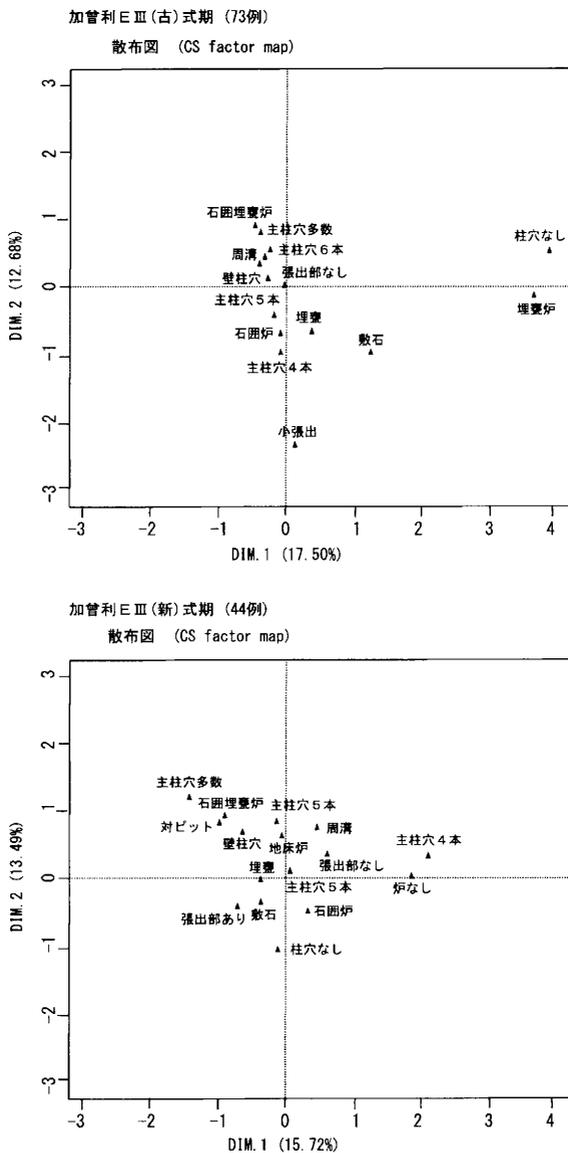


図9 A地域の住居属性の対応分析(1)

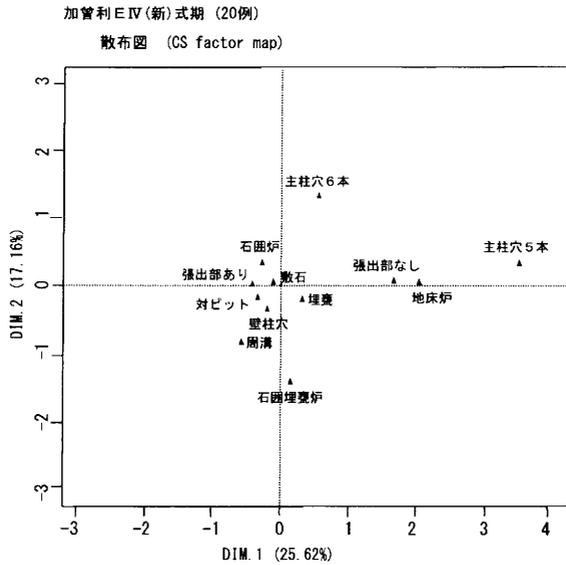
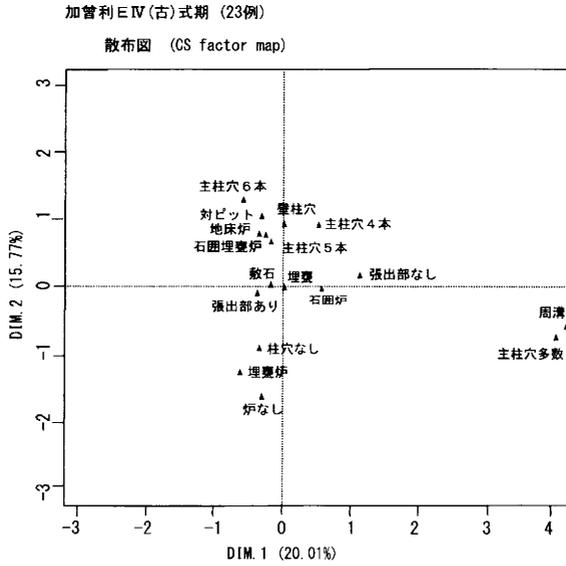


図10 A地域の住居属性の対応分析 (2)

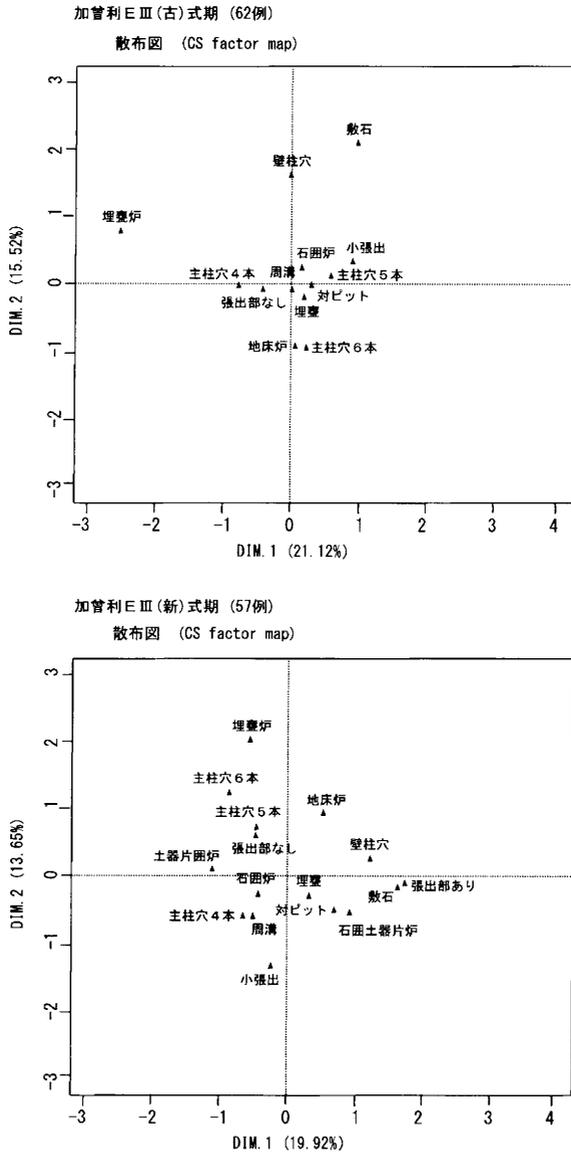


図11 B地域の住居属性の対応分析(1)

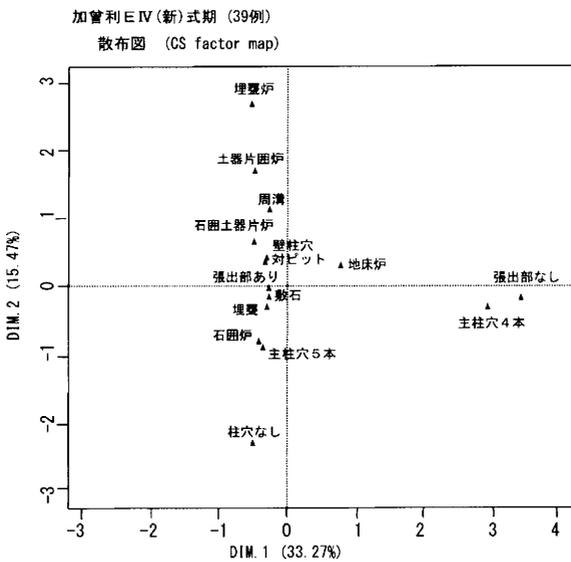
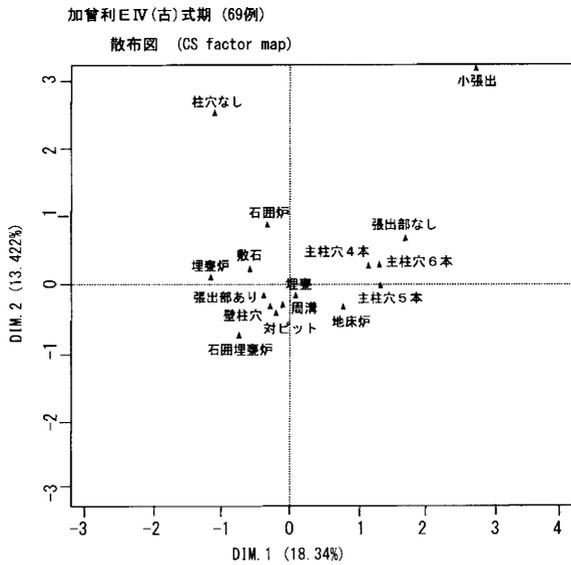


図12 B地域の住居属性の対応分析(2)

## V 考察

## (一) 柄鏡形住居の出現地域

柄鏡形住居は、加曾利EⅢ(新)式期のほぼ同時期にA地域とB地域に、明瞭な張出部をとまって出現した。しかし、どちらの地域により早く出現したかを、現時点で明らかにすることはできない。一般に、柄鏡形住居址の時期判断は埋甕を中心とした出土土器の型式編年で行っている。はたして土器編年をもとに、このようなわずかな時期差を明らかにすることができるのであろうか。谷口康浩と永瀬史人は、南関東で出土した加曾利E式期の完形土器九四三個体の文様の組み合わせを統計的手法にて分析し、加曾利E式土器の細別編年の妥当性について検討を行った(谷口・永瀬二〇〇八)。多変量解析の数量化三類を用いて分析した結果、比較的斉一的な土器と考えられていた加曾利E式土器においても、その型式変化は漸移的であり、段階的な区切りを設けることはできないとしている。同一地域においてさえ加曾利E式土器の細別編年に課題が残るのに、細別併行関係に課題が残っているA地域とB地域ではより一層難しいであろう(細田二〇〇八)。

このように、現時点では両地域間でどちらが先行するかの判断はできないが、柄鏡形住居の出現地を明らかにすることと同様に重要な課題がある。それは、特異な形状をした柄鏡形住居が、なぜこれほど短期間にA地域とB地域に拡散したかということである。しかも遺跡内では、柄鏡形住居を受容したのちには、遺跡内のほとんどの住居が柄鏡形住居に変化している。この理由は何であろうか。この理由を解明するためにも、張出部の象徴的意味を考える必要がある。

## (二) 張出部の象徴的意味

柄鏡形住居は、分布域や住居属性の検討から潮見台型を起源とするものでないことが明らかになった。加曾利EⅢ(新)式期に明瞭な細長い張出部をもつて突如出現したものである。さらに、距離的に離れた二つの地域にほぼ同時に出現し、これらの中間地域である埼玉県西部地域では、加曾利EⅢ(新)式期の柄鏡形住居址が検出されていない。この様に、張出部の出現の様子をみても、その拡散の状況をみても漸移的な形態変化や拡散をみることができず、伝播・系統論では理解が難しい。筆者は前稿において、港北ニュータウンの西部地域に位置する集落群の出現期の柄鏡形住居址を分析し、柄鏡形住居は、それまでの住居属性の組み合わせを捨て、加曾利EⅢ(新)式期に突然出現するのではなく、それ以前の多様な住居属性の組み合わせを引き継ぎ、そこに張出部を設け、敷石・周礫を施したものと結論づけた。本稿で検討したA・B両地域の柄鏡形住居も同様に、それぞれの地域で前時期から受け継いできた住居属性の組み合わせに、張出部を付加したものであった(川島二〇一七)。

それでは、なぜ張出部を付加したのであるのか。張出部の象徴的意味を考えると、張出部と比較的相関関係が強い壁柱穴、対ピット、埋甕、敷石の意味も合わせて考える必要がある。張出部とこれらの住居属性は無関係ではないと考える。竪穴家屋の空間分節やシンボリズムから、空間認知のパターンとその変化を検討した谷口康浩は、期中葉までの男女の性的原理と結びついた二元論的な空間分節が、中期後葉には内外の境界が強く意識されるようになったとしている。特に柄鏡形敷石住居では、埋甕、対ピット、敷石・配石、大形石棒、石皿などで主軸上に屋内空間と外界との境界を作り出している。この主軸上や出入口での空間結界や儀礼の過剰な発達の背景には、中期末の社会変動に対してのイデオロギーの強化・再編があると考えている(谷口二〇一〇)。

筆者も、張出部の意味はやはりその特徴的な形状にあると考えている。屋内への出入り口と考えられる細長い張出

部は、実用的には非常に不便である。そのような不便さがあつたとしても張出部を付加した背景には、当該期の人々が住居内への侵入を困難にし、住居の内外を明瞭に分けることにより、住居内を聖域化するという観念があつたのであろう。さらに、張出部と比較的相関がみられる、壁柱穴、対ビット、敷石、埋甕なども張出部と同じ観念をもつていた住居属性であり、これらとの組み合わせによって、その観念をさらに補強するものとなつたのであろう。この細長い張出部は、彼らの住居内を聖域化する観念をさらに強固なものとするために、加曾利EⅢ(新)式期に新たに採用した住居属性である。

一般に、観念に関するものは、その観念を受容するものにとつては意味があり、受容しないものにとつては全く意味をもたないものである。張出部が、観念を表象するものであるから、その観念を受容・共有する集団には瞬く間に伝わつたのである。このことが、距離的に離れた集団にはほぼ同時に出現したこと、その中間地域には出現しないこと、受容した遺跡では、その後短期間でほとんどが柄鏡形住居になるといふ様相の背景にあると考える。

## VI おわりに

柄鏡形住居の出現時期や分布、住居属性から柄鏡形住居の起源と張出部の象徴的意味を検討してきた。その結果、柄鏡形住居は潮見台型を起源にしたものではなく、それぞれの地域で受け継がれてきた住居形態に、張出部を付加したものであることを明らかにした。そしてそれは、住居内を聖域化する観念を表象するものと考察した。しかし、加曾利EⅢ(新)式期に住居内を聖域化する観念が急速に進んだ理由を明らかにすることはできなかった。そこには様々な要因が複雑に関係し合つていると思われる大きな社会変動があつたことは確かである。今後も、多面的な観点

からこの社会変動について検討を行っていくつもりである。

本稿は、平成二九年二月におこなわれた国史学会での口頭発表をもとに起稿しました。発表の機会を与えていただきました。また、谷口康浩教授には作成にあたり多くのご指導、ご教示をいただきました。また中島将太氏には図版作成に関してご教示をいただきました。末筆ながら記して深く感謝申し上げます。

## 註

- (1) 本橋は、川崎市潮見台遺跡の加曾利E2期の住居址で、壁が突出した部分に埋塞を埋設したものを「潮見台型」と呼称した。なお、「潮見台型」住居址の定義は必ずしも明確ではないが、この呼称はすでに定着しているため、本稿では「小張出部をもつ」住居址という広い定義で使用する。
- (2) 本稿での時期比定は、「埼玉編年」を基軸とした細田勝の細分に従い、特に加曾利EⅢ(新)式期は、吉井城山類型、渦巻文土器が出現する段階とした(細田二〇〇八)。なお出土土器からの時期判別が複数の時期にまたがるものは、最新の時期を採用した。なお、本稿においては、加曾利EⅢ式期および加曾利EⅣ式期の「古段階」を(古)、加曾利EⅢ式期を(新)と表した。
- (3) 主柱穴が7本以上で、壁柱穴の様に壁際に配置されるのではなく、主体部の中央部に位置しているものを「主柱穴多数」とした。
- (4) 対応分析には、2元のクロス集計表を分析する対応分析(Simple Correspondence)と、今回の様に多項目のクロス集計表を分析する多重対応分析(Multiple Correspondence)がある。多重対応分析の場合は、1・0であらわしたクロス集計表を用いる必要がある。なお、対応分析は、林知己夫が提唱した手法の数量化Ⅲ類と数学的に同値とされている分析手法であり、質的データの多元解析には非常に有効な手法である。
- (5) 櫛原功一は、長野県や関東地方西部地の中期末から後期中葉までの柄鏡形住居址の柱穴配置を分類し、その消長

を検討した結果、「柄鏡形住居は、中期後半までの主柱構造をもつ堅穴住居に柄部を付加した形で出現した」と述べている（榎原一九九五）。

### 引用文献

- 安中市教育委員会編 二〇〇三『東上秋間遺跡群発掘調査報告書』安中市教育委員会
- 石井寛 一九九四「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』第5号、七七―一一頁
- 神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課編 一九七七a『尾崎遺跡』神奈川県教育委員会社会教育部文化財保護課
- 神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課編 一九七七b『当麻遺跡・上依知遺跡』神奈川県文化財協会
- 神奈川県立埋蔵文化財センター編 一九八八『新戸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 川島義一 二〇一七「柄鏡形住居の出現期の再検討―地域の遺跡群研究の視点から―」『國學院大學大学院紀要』第四八輯、一九三―二一〇頁
- 木曾森野地区遺跡調査団編 一九八九『木曾森野遺跡』町田木曾森野地区遺跡調査会
- 金明哲 2009「対応分析法」『多次元データ解析法』一一九―一四二頁、共立出版
- 榎原功一 一九九五「柄鏡形住居の柱穴配置」『帝京大学山梨文化研究所 研究報告』第六集、一―四〇頁
- 群馬県企業局開発課編 一九八〇『三原田遺跡』群馬県企業局
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 一九九〇『田篠中原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 一九九六『白川傘松遺跡』北橋村、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 二〇〇五『横壁中村遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 後藤守一 一九三二a「高ヶ坂発見石器時代聚落遺址」『東京府史跡名勝天然記念物調査報告書』第4冊、三四―三七頁
- 後藤守一 一九三二年b「南多摩郡南高ヶ坂に於ける石器時代聚落遺蹟」『東京府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第5冊、一〇―二二頁
- 後藤守一 一九四〇「上古時代の住居」『人類学・先史学講座』第一六卷、八一―八八頁
- 佐々木藤雄 二〇〇三「柄鏡形敷石住居址と環状列石」『異貌』式巻、一一二―一二九頁
- 山武考古学研究所編 一九九七『行田梅木平遺跡（行田Ⅱ遺跡）』日本道路公団
- 新山第一遺跡調査団編 一九七七『しんやま…新山第一遺跡

発掘調査概報』新山第1遺跡調査会、東留米市教育委員会  
 谷口康浩 二〇一〇「縄文時代の竪穴家屋にみる空間分節と  
 シンボリズム」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研  
 究紀要』第二号、三七〜四七頁

谷口康浩・永瀬史人 二〇〇八「土器型式情報伝達と変容  
 —属性分析からみた加曾利E式土器の多様性—」『土器を  
 読み取る 縄文土器の情報』縄文時代の考古学7、一五七〜  
 一七六頁

東京都生涯学習財団編 二〇〇四『多摩ニュータウン遺跡No.  
 72・795・796遺跡(15)』、東京都埋蔵文化財センター

細田勝 二〇〇八「加曾利E式土器」『総覧縄文土器』四一〇  
 〜四一七頁、アム・プロモーション

本橋恵美子 一九八八「縄文時代における柄鏡形住居址の研  
 究」『信濃』第四〇巻八号三二〜四四頁、九号五二〜六五頁  
 長野県文化振興事業団編 二〇〇〇『更埴市内その3 縄  
 文』長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター編 二〇〇〇『郷土遺跡』『三子塚  
 遺跡群』三田原遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

山本暉久 一九七六「敷石住居出現のもつ意味(上)(下)」  
 『古代文化』第二八卷第二号、一〜三七頁、第三号、一〜三  
 一頁

山本暉久 一九八〇「縄文時代中期終末期の集落」『神奈川考

古』第九号、六三〜九七頁

山本暉久 一九九九「遺構研究 敷石住居址」『縄文時代文化  
 研究の一〇〇年』第三分冊、一一三〜一三〇頁

山本暉久 二〇一七「柄鏡形(敷石)住居址研究をめぐって」  
 『縄文時代の柄鏡形住居—研究課題の整理—』配布資料、一  
 〜二三頁

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 一九九二  
 『稲ヶ原遺跡A地点発掘調査報告』横浜市ふるさと歴史財  
 団埋蔵文化財センター

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 二〇〇〇  
 『大熊仲町遺跡』横浜市教育委員会

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 二〇〇三  
 『二ノ丸遺跡』横浜市教育委員会

横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 二〇〇五  
 『月出松遺跡・月出松南遺跡』横浜市教育委員会